都城フィロソフィ
エピソード集

令 和 4 年 1 月

本気で挑戦！
日本一の市役所！

第1部　素晴らしい人生を送るために

第1章　成功方程式（人生・仕事の方程式）
人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力……2

第2章　正しい考え方を持つ
あいさつが全ての基本……4
身だしなみは人のため……6
明るく元気に、素直な心で前向きに……8
感謝の気持ちを忘れず、謙虚に生きる……10
物事をシンプルに捉える……12
損得ではなく善悪で判断し、人間として正しいことを貫く……14

第3章　熱意を持って、地道に努力を続ける
自ら燃える……16
地道に努力を積み重ね、真面目に一生懸命仕事に打ち込む……18

第2部　素晴らしい都城市とするために

第1章　一人ひとりが都城市役所

一人ひとりが都城市役所……22

地域を愛し、地域と共に生きる……24

都城が持っているものを生かす……26

市民目線を貫く……28

傾聴と共感が改善を生む……30

自分の仕事ではないと言わない……32

率先垂範する……34

第2章　全員の心を一つにする

本音でぶつかる……36

ベクトルを合わせ、チームで取り組む……38

笑顔で仕事に取り組む……40

第3章　燃える集団となる

高い目標を持つ……42

有言実行でことに当たる……44

本気で挑戦する……46

成し遂げるまで諦めない……48

今できることは今やる……50

スピード感を持って決断し、行動する……52

大局観を磨く……54

よく働き、よく遊ぶ……56

第4章　結果にこだわる

自治体の常識・殻を打ち破る……58

楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行する……60

コンセプトを立て、戦略的に行動し、結果を出す……62

第1部　素晴らしい人生を送るために

第1章　成功方程式（人生・仕事の方程式）

人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力

人生や仕事の結果は、考え方と熱意と能力の掛け算で決まります。そのため、能力があっても熱意に乏しければ、良い結果は出ません。逆に能力がなくても、情熱を燃やし、一生懸命努力すれば、能力に恵まれた人よりはるかに良い結果が得られます。

また、熱意を持って物事に取り組むことで、日々、能力は進歩します。

この熱意と能力に考え方が掛かります。考え方とは生きる姿勢そのものであり、プラスからマイナスまであります。

そのため、人生や仕事の結果を最良のものとするためには、熱意と能力とともに、人間としての正しい考え方を持つことが何より大切です。

私がある小学校で開催されたオープンスクールで職業講師としてお話をしたときのことです。市職員の業務や仕事を子どもたちに紹介しました。市役所のさまざまな業種の話や入庁のきっかけ、仕事の喜びなど、短い時間でしたが、話すほどに子どもたちのうなずく目に真剣さがみなぎってきました。

子どもたちからの質問で、「未来の市役所に必要なものは何ですか？」と聞かれ、私は俯瞰して見る力や聴く力、プラス思考と基礎力、最後に組み合わせる力の５つのポイントをお話しました。

さらに質問が続きます。「５つの中で意識して身に付けないといけないものは何ですか？」

私は迷わず「組み合わせる力です」と答えました。

私たちは、日頃の業務の中で、市民ニーズに応えるために行政知識や地域ニーズなどを全力で掛け算しています。地域の掛け算は市職員ならではの仕事ですし、市民のためにお役に立ちたいという熱意があってこそです。

私たちが日頃何気なくやっていることが実は成功の方程式だった。フィロソフィとは、日頃の無意識を少しだけ意識することではないかと感じる出来事でした。

第2章　正しい考え方を持つ

あいさつが全ての基本

あいさつが全ての基本です。あいさつは、社会生活を営む上で欠かせないものです。したがって、簡単なあいさつすらきちんとできない人が、難しい仕事をすることなどできません。

どんなときでも、相手より早く、自ら笑顔であいさつする姿勢を持ち続けることが重要です。

あいさつによって、する側もされる側も、気持ちよく一日を過ごすことができます。職場においても、あいさつをきっかけとした会話で、さまざまな情報や仕事のヒントを得ることができます。

あいさつは、より良い人間関係を築く第一歩です。職場環境を良くし、職員の資質をより一層高めるためにも、あいさつに心を込めることが大切です。

今年の夏から息子の部活動の後援会長になり、息子を含め、自らあいさつができる部員が少ないことに気付きました。そこで、「あいさつ」にまつわるスポーツエピソードを練習の度に部員に話し、あいさつの効果を教え続けました。すると、徐々に自らあいさつができる集団に変わり始めました。あいさつができる集団になって何よりも嬉しいことは、大会等で結果を残せるようになってきたことです。これは、あいさつを通して、率先して物事に取り組む力や、チームの団結力が高まった結果なのではないかと思います。

また、部員同士があいさつをすることで、今まではなかった保護者間のあいさつも増え、コミュニケーションを取る機会が多くなりました。それによって後援会の結束力が高まり、組織づくりに効果が出ていると感じています。

「当たり前」とは、「当然」の当て字「当前」から生まれた言葉です。意味は「道理から考えて、そうあるべきこと」を指します。社会人として、人としての「当たり前」の一つとして挙げられるのがコミュニケーションの基本である「あいさつ」だと思います。フィロソフィを学び、それを実践することにより、良い雰囲気だけではなく、結果を残せる組織になってきていると実感しています。さらに、家族だけでなく、身の回りの人にまで「あいさつ」をするという習慣も身に付きました。私自身も、指導する立場として常に意識を高く持ち、率先して行動し続けようと思います。

身だしなみは人のため

市役所は、市民サービスを提供する「サービス業」であり、市民はお客様です。したがって、市役所での髪型や服装などの身だしなみは、お客様である市民がどう感じるか、いわゆる市民目線が全てです。提供するサービス自体が良くても、応対する職員の印象が悪ければ、全ての印象が悪くなることもあります。

身だしなみは、接する相手のために整えるものであり、時と場合に応じた清潔感のある身だしなみは、接遇の基本です。過度に意識した服装などは、自分のためのおしゃれでしかないことを肝に銘じ、日頃から互いに服装などを確認し合い、職員としてふさわしい身だしなみで接遇に努める必要があります。

お客様が私たちを市職員として判断するものの1つとして名札があります。以前、窓口でいすに座って対応をした際に、市民の方から、名札の紐が長く机に隠れて名前が見えていなかったというご意見をいただいたことがありました。このことがあってから、名札の位置をより意識するようになり、名前が見易い位置に着用するようになりました。すると、数カ月後、再度その方が来課された際に、「名前が見えたことで、安心して相談できました」というお言葉をいただきました。「相談している相手が誰なのか分からないと、信頼しきって相談することができなかった」とのことでした。

名札と同じように作業服も市職員であることを示すものの1つです。内面ももちろん大切ですが、「人は見た目が九割」と言うように、人を外見で判断する人は少なくありません。私自身も、以前受講した消防団の研修で、講師から「あなた方が着用している消防活動服は、非常時に市民の皆さんの気持ちを落ち着かせ、希望を与えるものです」と言われ、はっとしたことがあります。

市役所に来られるお客様は特に、私たちの身だしなみで第一印象が決まります。私たちが業務中に着用している作業服や名札。これらも「都城市」の三文字が記載してある以上、着用している間は動く都城市役所だという自覚を常に持ち、お客様に不安を与えない身だしなみに気をつけなければならないと感じました。

明るく元気に、素直な心で前向きに

多くの先輩たちが、どんな逆境にあっても、どんなにつらくても、常に明るい気持ちで理想を掲げ、希望を持ち続けながら一生懸命に努力を重ねてきた結果が、今日の都城市を築いています。

私たちも、この都城市を次の世代に引き継いでいく役割を担っていますが、暗く後ろ向きの姿勢では、物事をうまく進めることはできません。

非常に単純なことですが、まずは自分の、そして都城市の未来に希望を抱く必要があります。

そして、明るく元気に、人の話に耳を傾ける素直な心を持ち、前向きに生きていくことが、素晴らしい未来を創るためには必要です。

私は今、「明るく元気に、素直な心で前向きに」を意識しながら日々業務に取り組んでいます。

以前は、ちょっとした失敗をすると、そこから何をやってもうまくいかないような気がして、自信をなくし、後ろ向きな考えになることが度々ありました。そこで、このフィロソフィを意識して、気持ちが後ろ向きになってしまいそうな時は、元気なフリでもいいから、とりあえず「明るくやってみよう」と行動してみることにしました。すると、明るい気持ちで行動することで、自分が無意識のうちに縛られていたネガティブな思考を断ち切ることができ、「とりあえずこの状況から何か前向きに考えられることはないか、探してみよう」「悪いことばかりじゃないはず」と気持ちを切り替えられました。

いろいろと複雑に考えると、勝手に不安を膨らませて、一歩踏み出すことを躊躇してしまいがちです。少し不安を抱えている時でも、「考えすぎずに、できることからやってみよう!」と明るい気持ちで取り組むと、思っていたほど恐ろしくなく、想像以上に効率よく業務を進められることもあります。逆境にあっても、気持ちを切り替えて前向きに取り組むことで、それに伴って行動の結果も変わってくるのだと学びました。

感謝の気持ちを忘れず、謙虚に生きる

私たちが今日あること、そして存分に働けることは、市民はもちろん、職場の仲間や家族など、周りの多くの人たちの支えのおかげです。決して自分だけでここまで来ることができたわけではありません。

このことを忘れず、常に周りの人への感謝の気持ちや思いやりを持ち、互いに信じ合える仲間となって仕事を進めることが大切です。

また、初心を忘れることなく、人の話に耳を傾け、学び続ける謙虚な姿勢を持ち続けなければなりません。

おごることなく、謙虚な姿勢を持ち続けることは、周りの人からの信頼を得ることにもつながります。

仕事や私用が重なり大変忙しい日々が続き、自分自身、何をやっても手詰まりの状態で、なかなか先に進む事ができない時期がありました。そんな私を心配してくれた同僚や家族から、「あの仕事済ませておきました」「何か手伝いすることない？」「たまには家族で外食でもどう？」などなど、暖かい声掛けや手助けをしてもらいました。私が当惑している様子を見ていてのことだったと思いますが、周囲のみんなに支えられて、気を落とすことなく忙しい時期を乗り越えることができました。

仕事でも家庭でも、何事も自分ひとりで行っているのではなく、日頃から周りの人たちに支えられ、見守られているということに気付きました。今後も、今まで以上に感謝の心と謙虚な気持ちを持ち続けていこうと思います。

物事をシンプルに捉える

私たちは、ともすると考え過ぎて、物事を複雑に捉えてしまいます。しかし、物事の本質を捉えるためには、複雑な物事であってもシンプルに捉え直すことが必要です。物事は単純に考えれば考えるほど、本来の姿、すなわち本質に近づいていきます。

例えば、一見複雑に思える多種多様な市民ニーズへの対応も、突き詰めれば「市民の幸福と市の発展の実現」とのシンプルな目的に帰結します。

迷ったり壁にぶつかったりしたときには、原点に立ち返り、どのようにして複雑なものをシンプルに捉え直すかという考え方や発想の転換も必要です。

環境まつりは、前身となる「ごみ0まつり」から「都城市環境まつり」となり、毎年その時流に合ったテーマを掲げ開催しています。コロナ禍にある今年度も、どうにかして開催できないかと考えていたのですが、代替となる案も出ず行き詰っていました。そこで、原点に立ち返って環境まつりの本来の目的を考えると、「環境問題を知り、環境対策を考え、取組を広く市民に紹介すること」であり、それが本質であると気付きました。その後、その目的の達成に向けたアイデアを出し合うと、「環境啓発パネル展示」が案として挙がり、商業施設でパネル展示を実施した結果、来場者、参加者からとても好評でした。

環境まつりを中止にすることで、市民からどのような意見が出るか、長く続く環境まつりを開催しないデメリットなど、開催しないことを前提にマイナス面ばかり考えていましたが、目的をシンプルに捉え直し、その目的の達成のために今やれることは何かを検討することで、新たな取組を行うことができました。フィロソフィを業務遂行の念頭に置くことで、思考の幅が広がったと思います。

損得ではなく善悪で判談し、人間として正しいことを貫く

大きな夢を描きそれを実現しようとするとき、その行動が正しいものであるかを、人間が本来持っている基本的な倫理観に沿って判断する必要があります。

「決まりを守る」「嘘をつかない」「他人を大切にする」などの人間としての基本的な考え方に立ち返るのです。

また、自分だけが良ければいいという自己中心的な考えで仕事を進めていないかを点検しなければなりません。

自分を犠牲にしても他人を助ける「利他の心」を持てば、視野が広くなるとともに、周りの人の協力も得ることができます。

利他の心を持って行動することは、最終的に自分の幸せにもつながっていきます。

ゴミ出しの日にゴミステーションや周囲を清掃している方がいました。今年は、新型コロナウイルス感染症の影響で地区清掃の回数が減り、公民館のゴミステーション周辺が汚れてネットもぼろぼろになっていました。その現状に私も気付いてはいたのですが、いつも自分の予定を優先させて行動に移さないままでした。しかし、その日はこれまでのような損得感情ではなく、「いつも使わせてもらっている場所をきれいに保つ」という基本的な考えに立ち返り、清掃作業に参加することにしました。すると、一緒に作業をする中で、地域の昔話を聞くだけでなく、その方が子どもの登下校の見守りをしてくれているということも新たに知り、いつもお世話になっていると改めて気付くことができました。

現在も清掃回数は少ないままですが、以前よりも地域活動に積極的に参加するようになりました。利他の心を持って日常生活を見つめ直し、誰かに見られているのではなくても、縁の下の力持ちとなれるよう努力していきます。

第3章　熱意を持って、地道に努力を続ける

自ら燃える

物質には、自燃性・可燃性・不燃性のものがあるように、人間のタイプにも、熱意と情熱を持って自ら燃え上がる自燃性の人間、自燃性の人間が近くにいると燃える可燃性の人間、自燃性の人間が近くにいても燃えない不燃性の人間がいます。

私たちが目指すのはもちろん自燃性の人間です。熱意と情熱、そして強い意志を持ち、自ら考え積極的に行動する自燃性の人間になることで、周りの人を巻き込み、組織としても大きな力を発揮することができるようになります。

自ら燃えるためには、自分の仕事や人生を好きになるとともに、大きな夢や明確な目標を持つことが必要です。

私の所属している課には、大雨等の災害時に稼動させる重要な設備があります。その設備の稼動に関しては、課内教育や協議を行いながら安全な運用に努めてきました。運用していく中で、災害時のより迅速な対応をすることを考えると、操作要領が不十分だと感じる点がいくつか出てきました。そこで、担当内で協議を行なう際に、操作要領の改善が必要ではないかという意見を出しました。しかし、今まで用いてきた要領を変更することについては、前向きな意見もあれば否定的な意見もあり、膠着状態でした。そんな時に、市長のスマイルメッセージで「自ら燃える」の項目が紹介され、「自分の仕事・人生は自分で切り拓く」というお言葉がありました。それを聴いて、私も燃える人間になるべく、改善へ向けた資料を作成し、協議時に改善の重要性を伝えました。すると、その後の協議で、否定的な意見を持っていた職員からも「もっとこうしたら良いのでは？」という改善に対する意見が出るようになり、以前よりも充実した要領を作成することができました。

なかなか前に進まない状況でも、明確な目標を持ち、自ら道を切り拓いていくことによって、周りの人を巻き込み、組織として大きな成果を得られるということを実感しました。

地道に努力を積み重ね、真面目に一生懸命仕事に打ち込む

大きな夢や目標を持つことは、人生において非常に大切なことです。
大きな夢や目標を実現するためには、地道に努力を一つ一つ積み重ねることが大切ですが、その際には、気の遠くなるほどの忍耐が必要です。また、目標と現実のギャップに思い悩むことがあるかもしれません。
しかし、努力なくして成功はないことを認識し、苦しいときやつらいときにこそ、誰にも負けない努力を積み重ねなければなりません。
常に謙虚で勤勉かつ誠実に努力を積み重ね、一生懸命に物事に打ち込んだ結果として、何かを成し遂げたときに、何ものにも代え難い喜びが得られるのです。

私は専門職ということもあり、採用が決まった時、今まで培った知識を業務に生かして市民の皆様の為に頑張っていきたいという目標を掲げ、これまで業務に励んできました。

しかし、実際に業務を行うと、自分の知識量が少ないにも関わらず、情報は次々と新しくなっていくため、想像していたものとのギャップが大きく、悩むこともありました。そんな時、このフィロソフィを心に留めて、日々新しい知識の習得に励み、研修会に参加したり、先輩方に相談したりするなど、自分にできることを見つけ、より良い市民サービスが提供できるように努力を積み重ねました。その結果だと思いますが、対応した市民の方から「ありがとう」というお言葉をいただけるようになり、何ものにも代え難い喜びを感じることができました。

日々努力を積み重ね、真面目に一生懸命に打ち込めば、成果を上げることができ、大きな喜びを感じることができると学びました。

第2部　素晴らしい都城市とするために

第1章　一人ひとりが都城市役所

一人ひとりが都城市役所

都城市役所の職員は、さまざまな場で市民と接しています。

仮に100人中99人が市民のことを考えて仕事をしていても、1人の職員が市民の信頼を裏切るようなことをしてしまうと、残りの99人の職員への信頼も傷つけてしまいます。たった1人の間違った行動が、99人がこれまで築いてきたもの全てを壊してしまうのです。

職員一人ひとりが都城市役所の主役であり、都城市役所の看板を背負っていることをしっかりと肝に銘じ、当事者意識を持ち、一期一会の精神で市民サービスに努めることで、市民に信頼される都城市役所となります。

先日、商品に関する問い合わせでいくつかの企業に電話を掛けたところ、ある企業では、担当者が不在だったため、代理の方に対応していただきました。始めは、「大丈夫だろうか？」と不安に思っていたのですが、とても丁寧な対応で分かりやすく、清々しい気持ちになり電話を切りました。また、他にもいくつかの企業に電話を掛けたところ、ある企業の担当者は、電話に出ても「はい」と言っただけで名乗らず、説明の途中でため息をつくなど、とてもサービス業とは思えない対応でした。この電話対応によって、企業全体に対するマイナスのイメージを抱き、良い対応だった企業の商品により魅力を感じました。

それまでの対応がどんなにすばらしく信頼を得ていても、お客様が1度でも「対応が悪い」と感じてしまうと、これまで積み上げてきたものがゼロ（マイナス）になってしまいます。市役所で対応をするお客様についても、1度の対応が今後の信頼につながるということを常に意識して、これからも日々業務に励んでいきます。

地域を愛し、地域と共に生きる

まちづくりは、市役所のみで行うものではなく、市民や企業、ＮＰＯなどの多様な主体が連携して行う時代になっています。

そのため、市役所の仕事は地域、そして市民に支えられて成り立っていると言えます。地域や市民の活力が市の活力に直結するのです。

まずは、「地域を愛し、地域と共に生きる」を掲げる私たち職員が、「隗より始めよ」の精神で、地域の行事などに積極的に参加し、地域の底力を引き出していくことが重要です。

また、地域に参画し、地域を見ることや地域の声を聞くことで、都城の魅力を再認識するとともに、仕事のヒントを得ることもできます。さらには、人との絆を実感できることから、人生がより豊かなものとなります。

通勤途中の道路が、台風の影響による落ち葉と倒木で覆われていました。何とか通行できる状態ではありましたが、高齢者が多い集落の道路であったため、とても心配になり、家族や友人と掃除作業をすることにしました。

以前は、地域住民全員で清掃や草刈りを行っていたのですが、高齢化と過疎化により困難になったため、現在は、地域の有志が集まり、ボランティアで活動しています。最近の活動に集落の高齢者が参加することはなかったのですが、台風後の清掃には、地域の高齢者がなんと全員出てきてくれました。連絡をした訳でもないのにどうしたのかと訊ねると、「いつもしてもらっちょるから、何かできんやろうかと思って」と答えました。

これまでは、高齢だからしなくてもいいという雰囲気を感じていたのか、私達がボランティア活動をしていても参加することはありませんでした。しかし、私達が活動する姿を見て、自分達でもできることがあるのではないかという意識に変わり、今回参加してくれたのではないかと思います。現在も、月に1～2回程度清掃や草刈りを行っていますが、多くの住民が参加してくれるようになり、地域内のコミュニケーションも増えました。これからも、ボランティア活動を通して地域を愛する気持ちを次の世代へも伝えていきたいです。

都城が持っているものを生かす

自治体間の競争が激しさを増す中、都城市が選ばれる自治体となるためには、都城の魅力を高めていく必要があります。

そして、最小の経費で最大の効果を上げるには、都城が元々持っているものを掘り起こし、創意工夫を凝らしたアイデアで、付加価値を与えて活用することが、一番の近道です。

都城には、身近にありすぎて、私たちが気付いていない魅力が数多くあります。さまざまな視点から、その魅力を発掘することが重要です。

肉と焼酎に特化したふるさと納税や、ショッピングモールをリノベーションした図書館など、本市の施策には「都城が持っているものを生かす」との精神が根底に流れています。

本市が持つ、様々な素晴らしい産品を対外的に発信し、販売につなげることで、その産品を通じて、市の魅力そのものの発信を行っています。

コロナ禍で人の移動等が制限される中での業務推進に多くの困難が生じましたが、本市には、脈々と育んできた産品そのものが持つ魅力や素晴らしい人財、これまでの取組等を通じて培ってきたネットワークがあります。それらを生かした新たなニーズの把握、いち早く取り組んだオンラインでの商談、協議などを行った結果、昨年を上回るペースでの業務成果につながりました。

従来の手法に固執することなく、柔軟な発想で、真摯に、本気で取り組むことで、都城市が持っているものに新たな視点で付加価値を与えることができるのだと感じました。

市民目線を貫く

市役所は、市民の幸福や市の発展を実現するために市民サービスを提供する「サービス業」です。市民サービスを提供するに当たって、市役所に来る全ての人の満足を得ることは、非常に難しいことです。

なぜなら、市役所には手続きや相談のためにやむなく来る人がほとんどであり、明るい気持ちを持った人ばかりではないからです。

そのような人に気持ち良く帰ってもらうためには、市民目線を貫き、市民に寄り添った最良のサービスを提供することが必要です。

市民の喜びが私たちの喜びであると考えながら仕事に取り組む必要があります。

ある市民の方が、手続きの仕方が分からないということで窓口に来られ、その対応をしました。申請用紙をお渡しして、記入の仕方や手続きの流れについて説明をしていたのですが、ずっと不安そうな表情で話を聞いていました。そこで、お客様の不安な気持ちや現状を詳しく聴いた上で、分からない点について、専門用語をなるべく使わずに、実態に沿った内容で分かりやすく説明をすることに徹しました。すると、徐々に緊張が解けたような顔つきになり、お帰りになる際には「不安だったけど来てよかったです。分かりやすい説明をありがとうございました」と言っていただけました。

この経験から、まずはお客様のお話を傾聴し、寄り添った言葉遣いで対応するだけでもお客様の不安な気持ちを取り除けるということが分かりました。「もしも自分がその立場だったら」という市民目線を常に持ち続けることで、1人1人に寄り添った最良のサービスを提供していきたいです。

傾聴と共感が改善を生む

人と接するときには、積極的に相手の話を聞く傾聴の精神を持つことが重要です。相手の意図をくみ取り、相手が何を望んでいるかを知ることからコミュニケーションが始まります。

相手が考えの異なった主張をしても、一刀両断に切り捨てることなく、相手に共感しその考えを理解することで、新たな視点から物事を見つめ直すことができるようになり、さまざまな改善のヒントを得ることができます。

また、相手が意見を述べてくれることに感謝することは、互いの信頼関係を築くことにもつながります。

傾聴と共感は、組織としても個人としても、成長する良いきっかけを生み出します。

市民の方がある事業の相談で窓口に来られたのですが、ご相談内容が事業の対象に該当しないと分かりました。しかし、「市役所ではできません」とすぐに否定せず、お話を最後まで伺った上で、市役所の事業の対象にはならないということを説明しました。また、他の機関で対応ができる内容だったため、その機関の紹介をしたところ、納得していただき、感謝の言葉までいただきました。

話を聴いて、すぐに該当しないとお伝えすることもできたのですが、お客様が事業を利用したいと考えた経緯や、相談内容の詳細を伺ったことで、問題解決のためのヒントを得ることができました。その結果、新たな視点から代替案を提示することができたのだと思います。これまでの経験に捉われることなくまずは相手の話を傾聴すること、お客様目線に立って共感し、何を望んでいるのかを考えることの大切さを実感しました。

自分の仕事ではないと言わない

組織では、さまざまな仕事をみんなで分担しながら進めています。一人ひとりが自分の仕事に責任を持ってやり遂げていくことが組織全体の成功につながりますが、仕事を進める中では、当初想定していなかった誰にも属していない仕事も生じてきます。

自分の仕事ではないと言うのは簡単ですが、結局は誰かが担わなければ、仕事を成功に導くことはできません。

いたずらに時間をかけてやらない理由を探すのではなく、前向きな姿勢でどうしたらやることができるのかを考え、自分の成長につながるという思いを持って仕事に取り組むことが、組織全体にも良い影響を与えます。

4月の定期異動で他課へ異動し、不慣れな業務に追われて戸惑うことが多々ありました。そんな状態を上司や同僚からよくお気遣いいただき、「何か手伝おうか」等の声掛けで業務を手伝っていただくこともあり、本当に助けられました。最近も、私が担当している業務の件で困っていた際、状況を察した同僚が、担当でもなく自身の仕事も忙しいにも関わらず助言をくれたことで、問題解決につながり、無事に成し遂げることができました。

これらの経験から、「自分の仕事でないと言わない」の大切さを身に沁みて感じることができました。これまでも、自分の仕事でないと言わずに何事も真摯に取り組もうと心掛けてきたつもりでしたが、仕事が忙しい時などは特に、周りを見る余裕がなく、周囲への気配りができていなかったように思います。今後は、課内全体に目を向け、自分の業務以外にも率先して取り組んでいきたいです。

率先垂範する

周りの人の協力を得るためには、率先垂範の精神で物事に取り組まなければなりません。口先ばかりではなく、人の嫌がるような仕事にも真っ先に取り組む姿勢が必要です。

特に、私たち職員は、地域においても自ら先頭に立って行動し、市民の信頼を得る必要があります。

率先垂範することは決して簡単なことではなく、強い信念と行動力が必要ですが、物事を成し遂げることで、自信と信頼を手に入れ、自らの成長を実感することができます。

都城市をより良いものとするために、役職に関係なく、全ての職員が率先垂範する風土を創り上げることが重要です。

年度の途中で課内の職員が欠員となり、その職員が持っていた業務を分担して行うことになりました。それぞれが持っている仕事だけでも忙しく、なかなか手が上がらなかったのですが、ある職員が「勉強にもなるから」と進んで手を上げ、引き受けてくれました。率先垂範して自分の仕事ではない他の業務を遂行していく事は、決して簡単なことではなかったと思いますが、強い信念と行動力を持つ事で、課内の業務が円滑に進められています。それを見た担当内の他の職員も、進んでその業務内容を共有し、知識を習得する事で、現在では全員が対応できるようになりました。

人の嫌がるような仕事でも、前向きな姿勢で率先して取り組む職員を見たことで、私を含め周囲の職員も仕事に対する意識や積極性が向上し、チームとしての結束力が高まることにもつながっていったのだと実感しました。

第2章　全員の心を一つにする

本音でぶつかる

責任を持って仕事をやり遂げていくためには、関係者全員が、役職を超えて、互いに気付いた課題や問題を遠慮なく指摘し合うことが必要です。

安易に妥協せず、何が正しいかを考え、本音で真剣に議論しなければなりません。課題や問題に気付いていながら、指摘せずに和を保とうとするのは大きな間違いです。

談論風発をもって仕事を進め、時には激論を交わしながら勇気を持って互いの考えをぶつけ合っていく必要があります。

そして、議論の末に決定したことには、全員で協力しながら実行していくことで、互いの信頼関係も生まれ、より良い仕事ができるようになります。

私が所属する課では、それぞれに振り分けられた担当地区に係る業務を進めています。各地区で様々な問題点や検討事項が発生するため、情報共有及び業務の統一を図ることを目的として、月1回、担当職員全員が出席する会議を開いています。その中で、意見を出し合いながら全体の統一事項を定め、それぞれの業務へ反映させています。

担当者全員がいる会議の中で議論を尽くすことによって、様々な視点から提案や改善点を発見することができ、各懸案事項を解決する糸口になっています。会議は、役職を越えてそれぞれが気付いた課題や問題を遠慮なく指摘し合あえる場となっており、その議論の結果、決定したことについては、全員で協力しながら実行します。本音でぶつかることで、業務の発展だけではなく信頼関係の構築にも繋がっていると実感しています。

ベクトルを合わせ、チームで取り組む

人には、それぞれさまざまな考え方がありますが、それぞれの力のベクトルがそろわなければ、力は分散してしまい、一つの大きな力とはなりません。

このことは、個人プレーだけでは勝てない野球やサッカーなどの団体競技を見ればよく分かります。

みんなでベクトルを合わせるためには、報告・連絡・相談、いわゆる「報・連・相」を怠らないこと、そして、職場全体で足並みをそろえて互いに助け合うことを意識しなければなりません。

チームの力が同じベクトルに集結したとき、何倍もの力となって驚くような成果を生み出します。1＋1が3にも5にもなるのです。

本課では、3年を一括りとする事業計画を策定し、高い目標を掲げ職員一丸となって事業に取り組んでいます。

計画策定時、課としての目標値を協議の上設定したのですが、指示があったのは、さらにそれを上回る目標値でした。当初、課内では悲観的な言葉しか出なかったのですが、出来ないではなく、どうすれば達成できるか、効果的な方法はないかなど、協議・検討を重ねました。目標達成のための具体的な取組を明確に示して実行し、毎年実績評価を行うことで、改善しながら推進してきました。

そして、3年間の継続した取組は、高いと感じていた目標値を達成見込みとして上げることができました。これは、課内の職員の意識と足並みを揃えた結果だと確信しました。この結果に対して、職員一同達成感を感じると共に、今後の課題にも着目するというさらに高いところを目指す姿勢も見られました。

どんなことも、悲観的な考えではなく、話し合いや協議を通して共通の課題意識を持ち、前向きに取り組むことで、高い目標も達成できるのだなと実感しました。お互いの情報交換「報・連・相」を怠らず、職場で目的意識を共有し、足並みを揃えることで、結束力が高まり、驚くような成果を上げることができました。

笑顔で仕事に取り組む

仕事は決して楽しいことばかりではなく、苦しいことやつらいこともあります。しかし、苦しいときやつらいときこそ、成功する未来を想像し、笑顔で仕事に取り組まなければなりません。

笑顔には、自分だけではなく、周りを元気にする力もあります。全員の気持ちを一つにして仕事に取り組むためには、笑顔の相乗効果は欠かせません。

また、笑顔でいると、良いことが自然と舞い込んでくるものです。

都城市役所は、日々、笑顔あふれるまちの実現を目指しています。ポジティブに仕事に取り組み、市役所から笑顔を発信することで、都城市の元気をつくり出していくのです。

前例の無い業務を遂行していくに当たり、何をするにも正解が分からず、解決の見通しも立たずに不安な時期が続いていました。しかし、当時の担当内は常に笑顔に溢れており、今思い返すと、辛かったことよりも楽しく仕事に取り組めていたことの方が強く記憶に残っています。業務についても、どうしようもなく後ろ向きになりそうな時には、担当同士で話し合い、前向きな考えで進めていくことができたため、目標達成に向けて問題点を1つずつ解決し、成果を挙げることができました。

フィロソフィにもあるように、笑顔は自分だけでなく、周りを元気にして前向きにする力があるのだと思いました。笑顔でいることによって、周囲のモチベーションを保つことができ、気持ちを一つにして困難を乗り切れる力を発揮することができます。

第3章　燃える集団となる

高い目標を持つ

都城市役所は、都城フィロソフィを策定し、さらなる人財育成による組織活性化で、「市民の幸福と市の発展の実現」に取り組んでいます。その中で、「本気で挑戦！日本一の市役所！」との高い目標を立てました。

高い目標を持つ人は大きな成功を得られ、低い目標しか持たない人はそれなりの結果しか得られません。自ら高い目標を設定しパーフェクトを目指そうとすると、そこに情熱と力を注ぐことが可能になり、それが成功の鍵となるからです。

壮大な夢や高い目標を描いてこそ、想像もつかないような偉大なことを成し遂げられます。

職員研修で講師をした際、研修の最後に『うさぎとかめ』の話をしました。内容は、何故うさぎが負け、何故かめが勝ったのかということを受講生に問うものでした。ほとんどの受講生は、うさぎは怠けたから、かめはこつこつがんばったからといった答えでした。

もちろんその答えも正しいものですが、私の回答は、うさぎは自分より劣るかめを目標にし、かめははるかに遠い山の頂上を目標にしたからというものでした。誰かと比べるのではなく、自分自身の掲げた目標達成のため、ひたむきにこつこつと努力したことで、壮大な目標であっても、かめが勝利を手にしたというものです。このように、目標設定の仕方で、結果が大きく違ってくることを伝えたかったのです。

私自身も、目標設定する時、できるだけ達成可能なものに逃げてしまうことがあります。そのような時、自分が口にした『うさぎとかめ』の話を思い浮かべ、自ら高い目標を設定し、こつこつと努力することに気持ちを奮い立たせるよう心掛けています。

有言実行でことに当たる

世の中ではよく、「不言実行」が美徳とされますが、都城市役所では、やると決めたことを周りの人に宣言する「有言実行」を大切にします。

まず、自らが手を挙げて「これは自分がやります」と周りの人に宣言することで、自分を奮い立たせることができます。このことによって、目標を達成することがより確実となります。

また、言葉にすることは、周りの人を巻き込み、みんなが一致団結する絶好のきっかけとなります。

朝礼や会議など、あらゆる機会を捉えて自分の考えをみんなの前で宣言することで、自分を励ますとともに、物事を成し遂げるエネルギーとするのです。

今年、担当内の目標として、滞納処分の推進を掲げていました。当課では、まだ滞納処分の実績が少なく、目標達成には困難を要することが予想されました。そのような状況でしたが、自分は徴収経験があったこともあり、「滞納処分件数を昨年より増やす」という目標を立て、担当内で宣言しました。宣言したことによって、担当内の他の職員を奮い立たせることができたのか、皆で協力しながらこれまで以上に熱心に仕事に取り組んだ結果、掲げた目標を達成することができました。

不言実行だと、自身だけで目標を立てているため、業務に支障が出るほどでなければ、「ほどほどでいいや」と手を抜いてしまうことがあります。それでは業務の推進・改善にはつながりません。今回、有言実行をしたことにより、自身に目標達成のプレッシャーが掛かり、業務に対する意識が変わりました。また、宣言したことによって、他の職員もその目標に向かって協力してくれるようになり、一致団結して業務に取り組み、満足のいく成果を挙げることができました。

本気で挑戦する

チャレンジ（新しいことをする・工夫をする・改善をする）が仕事であり、ルーティン（前例踏襲）は、仕事ではなく作業です。

人は得てして変化を好まず、現状を守ろうとしがちですが、チャレンジせず、現状に甘んじることは、成長を諦めることを意味します。

チャレンジとは、高い目標を設定し、常に新しいものを創り出していくことですが、本気で困難に立ち向かう勇気とどんな苦労もいとわない忍耐、そして努力があってこそ実現します。

「日本一の市役所」になるという強い意志を持ち、何事も漫然とやるのではなく本気で挑戦することで、より良い都城市の未来を創っていくことができます。

私の今年度の個人的な目標として、消防の予防行政に活きてくるような資格取得及び能力の向上があります。今年は3種受験したのですが、そのうち最も取得したかった資格の試験で合格を逃してしまいました。全部合格を目指して本気で挑戦していたからこそ、その結果がとても悔しかったです。幸いにも、不合格だった試験は1月にも再受験することが出来るため、この悔しさを胸に、後悔を重ねないために、受験まで「本気の挑戦」をしていきたいと思います。

今回の経験で、「本気で挑戦する」こととは何かを知る良い機会となりました。本気で挑戦するからこそ、達成したときの喜びは何よりも大きく、失敗したときの悔しさは何よりも大きいのだと思います。私たち消防吏員の仕事は、人命に直結する場面が多い特殊なものであり、極端に言うと、仕事において本気の挑戦から生じる成功と失敗は「人の生と死」です。だからこそ、消防吏員は他のどのような職業よりも仕事に誠実に向き合い、命に向き合い、人命救助の最前線として本気で挑戦していかなければならないのだと強く感じました。

成し遂げるまで諦めない

何かを成し遂げるかどうかは、その人の持っている熱意と執念に深く関わっています。何をやっても成し遂げられない人には、熱意と執念が欠けています。体裁の良い理由を探し、自分を慰め、すぐ諦めてしまうのです。

一度諦めてしまうと、諦めることに慣れてしまい、多くのものを失ってしまいます。

目標を設定したら、一歩一歩着実に進んでいくことしかできません。手詰まりの局面であるように見えても、地道に努力を積み重ね、精一杯取り組むことで見えてくるものがあります。

物事を成し遂げるには、自分に厳しく、目標達成に向かって、粘り強く最後まで諦めずにやり抜く姿勢が必要です。

新しい業務を任されたのですが、内容の専門性が高く、部署内で知る人も少なかったため、手探り状態で進めなければなりませんでした。業務の期限も決まっており、どうしてもそれまでに仕上げなければならなかったため、インターネット等を活用し、分からない用語や規格などを調べ、部署外の職員や事業者の方に話を伺ったり、資料を頂いたりしたことで、一つずつ課題をクリアしながら何とか期日までに仕上げることができました。

期限が迫る焦りやプレッシャーから、業務を投げ出したくなったこともありましたが、上司から任された期待を裏切りたくない気持ちと弱気な心に負けたくない気持ちで業務を成し遂げることができました。困難な出来事があっても、諦めずに現実と向き合い、一歩ずつでも前に進める気持ちでコツコツと地道な努力を積み重ねることが大切なのだと学びました。

今できることは今やる

私たちは、常にただ一つの仕事だけをしているわけではありません。複数の仕事に同時並行で取り組むことや、思わぬ仕事が舞い込んで、予定よりも多くの仕事を抱えることもあります。しかし、仕事の遅延で市民の生活に影響を与えてはいけません。

市役所の仕事は年度単位が基本ですが、年度始めはその年の計画を立て、軌道に乗せることに苦心します。また、年度終盤は、仕事の仕上げと次年度の準備であっという間に時間が過ぎていきます。

そのため、腰を据えて取り組めるのは、実質半年間だという心構えを持ち、「今できることは今やる」との精神で、前倒しで仕事を進めることが重要です。

会議の調整役になった際、日程調整や会場の予約などの事前準備を行いました。会議開催の時期を考えると、期日にまだまだ余裕がありましたが、「今できることは今やる」の精神で早めに通知文書を作成し、各調整を行いました。その後、準備を進めていると、別件で緊急を要する業務が複数発生し、対応に相当の時間を要することとなりました。しかし、行動できる時に調整を行っていたことで、支障をきたすことなく無事に会議を開催することができました。

早め早めの行動を意識して仕事に取り組むことで、不測の事態にも対処でき、未来の自分に余裕を与えることができるのだと実感しました。フィロソフィにもある通り、年度中に当初は予想していなかった仕事が舞い込んできて、予定していた作業を計画通りに進められないということは多々あります。今後も、「今できること」を積み重ね、滞りのない業務遂行につなげていきたいと思います。

スピード感を持って決断し、行動する

仕事を進める上で、スピード感は最も重要な要素の一つです。

特に、私たちは市民の安心・安全を確保する仕事をしているため、スピード感を持って決断し、行動することを意識しなければなりません。

決断や行動が遅れると、絶好の機会を逸してしまい、十分な成果が得られない可能性もあります。機を逃さずに当初から迅速に行動し十分な成果を上げるためには、常に仕事の進捗や周りの状況に目を配りながら、真剣に仕事に取り組むことが重要です。

このことが、周りの人を巻き込み、組織全体のスピードアップにもつながっていきます。

昨年から新型コロナウイルス感染症が蔓延し、地元事業者の売上減のダメージは非常に大きいものでした。そのような中で、「巣篭もり消費の動き」や「消費動向の変動」をいち早く感知し、流通に乗らない地場産品をアソートした「復袋」のオンライン販売を実施しました。多方面への調整は本当に大変でしたが、関係者の協力をいただき、迅速に対応することができました。その結果、先行して実施する予定だった他県の取り組みを追い抜き、通常の月の10倍以上の売上と、地元事業者のコロナ対策や都城市の対外的ＰＲにつながりました。

「スピード感」、つまり機を逃さずに決断や行動を迅速に行うことで、絶好の機会を逃さず成果につなげられるということを改めて実感できました。さらに、地元事業者からも喜びと感謝の声を聞くことができ、大きな達成感も得ることができました。

大局観を磨く

大局観とは、物事の全体を広い視野で捉え、本質を把握する見方です。

市役所の一つひとつの事業を切り取ると、必ずしも市民の全てが受益者とならない事業も存在します。そのため、事業の効果については、市全体を広い視野で捉え判断しなければなりません。

また、市民ニーズが高度化・多様化する中で、複数の分野にまたがって市民サービスが提供されるケースも増えています。そのため、多角的かつ長期的な視点を持って全体を見渡すことで、最良のサービスを提供する必要があります。

大局観は、一朝一夕に身に付くものではありません。アンテナを高く、ネットワークを張り巡らし、常に新しい情報に触れることによって日々磨かれていきます。

業務中に「もっとこうしたら便利なのに」、「処理が早ければ効率的に業務を進められるのに」と感じたことは無いでしょうか？私も過去にその思いを強く感じた一人でした。しかし、実際に一から見直しを行おうとすると、膨大な時間や労力が必要になります。「もっと簡単かつ効率的に見直しできないか？」と考えていた時に出会ったのが『全国都市改善改革実践事例発表会』でした。

全国の自治体で実践された事例発表に触れ、幅広い視野を持つことや他自治体とのネットワークの重要性を感じました。発表は、窓口業務や消防防災業務、農業、土木など様々、また内容も日々の業務のちょっとした改善の取組についてです。例えば、「折り返し電話の見える化」は、表計算の共有機能を活用して市民からの折り返し電話の一時対応のスピードアップを実現するものです。聞けばそのくらい出来ると思うような取組ですが、発想のシンプルさに驚かされました。

私たち職員は、より良い市民サービスの提供のために日々改善を行っています。多角的視点や長期的視点に加え、他自治体や自治体職員間のつながりを深めることで、大局観を身に付けることが出来るのではないでしょうか。多くの職員が大局観を持つことによって、一人の千歩から千人の一歩となり、市民の笑顔を私たち職員の笑顔につなげたいと感じました。

よく働き、よく遊ぶ

仕事は、人生の多くの時間を費やすものです。仕事に一生懸命に取り組み充実感を得ることは、人生を豊かにします。仕事で得る生きがいや喜びは人生にとって欠かせないものですが、一方で、私たちは家族や地域に支えられて生きています。

私たちがライフステージに応じて、家族や地域のためにできることを意識し、仕事以外の場でも仕事と変わらぬ情熱を持つことができれば、人生の喜びは増していきます。

仕事以外の場でも視野を広げ、自分を高めるとともに、心身の健康を養うことも重要です。常に一生懸命に前向きな姿勢で、両者の調和を図ることで、人生の喜びは倍増します。

私は、４月から現課に異動してきたのですが、前職も含めて、経験したことのない業務が非常に多くありました。見聞きした内容を忘れてしまうほど余裕がなく、自分から新しいことにチャレンジする気力もありませんでした。また、その当時は、週末も疲れていることを理由に家でダラダラと過ごす日がほとんどでした。

しかし、「よく働き、よく遊ぶ」という気持ちで、休日には県内をドライブするなど、どこかへ外出するようにし、外の空気を積極的に取り込むようにしてみました。すると、非常にリフレッシュすることができ、休日明けには、心に余裕をもって仕事に取り組めるようになりました。また、県内道の駅やスーパーへ足を運ぶ機会が増えたことで、地元商品のラインナップやデザイン等を見ることにもつながり、業務に役立つ知識も増えました。

「仕事だけ」と仕事ばかりに力を注ぐと、逆にパフォーマンスが下がってしまい、いい仕事ができないということを学びました。また、一見仕事とは関係ないと思うことでも、視野を広げることで、仕事に結びつくこともあるのだと学びました。これからもしっかり働き、休日にはしっかりと休息し、楽しくいい仕事ができるようにしたいと思います。

第４章　結果にこだわる

自治体の常識・殻を打ち破る

自治体は、前例を踏襲しがちですが、時勢が目まぐるしく変わる現在、既存の考え方に捕らわれてしまっては、市民が本当に必要なサービスを提供することはできません。また、新たな課題に柔軟に対応することもできません。

自治体だからこうあるべきという固定観念に捕らわれず、自由で前向きな発想で、市民のために何が最良であるかを判断し、果敢に実行していくことが、「日本一の市役所」を目指すための土台となります。

自治体の常識・殻を打ち破ることは、自分の成長にもつながります。常に、都城市、そして自分の持つ無限の可能性を信じ、勇気を持って挑戦する姿勢こそが、素晴らしい成長をもたらします。

私があるプロジェクトチームの一員として加わることになった時のことです。このプロジェクトの課題は、突発的な事業を迅速に処理しなければならないものでした。この課題をどう解決するか皆で意見を出し合ったところ、解決するためには、1年を通して取り組まなければならないという結論に至りました。時間がかかってしまうのは仕方がないという空気感がプロジェクトチームの中にありましたが、その場合、市民の期待に応えられないということも自覚していました。

そこで、別の方法がないかと協議を重ねた結果、このプロジェクトの本質に立ち返り、自治体の常識に捕らわれない全庁的な取組にすることで、当初の計画よりも大幅に期間を短縮することができました。大きな課題をクリアしたことで、チームに大きな達成感が生まれ、関わった職員のスキルアップにもつながりました。

自治体だからこうあるべきだという固定観念に捕らわれず、自由に前向きな発想で議論を尽くすことで、市民が満足するサービスを提供できるのだと思います。業務の遂行が困難な時もありますが、市民にとって何が最良であるかを判断し、実行していくことで、多くの市民が喜ぶ結果につながります。

楽観的に構想し、悲観的に計画し、楽観的に実行する

何かを始めるときに、最初から後ろ向きな気持ちでいては、何も生み出すことはできません。新しいことを成し遂げるには、まず夢を持って、楽観的に構想することが大切です。楽観的な気持ちで自由に構想することで、実行に必要なやる気も増していきます。

しかし、計画を立てるときには、必ずやり遂げるという強い意志を持った上で、起こり得る全ての問題を悲観的に想定する必要があります。そして、対応策を慎重に考え尽くし、成功までの行程を固めなければなりません。

そして、多少のトラブルが生じても想定内と考え、必ずできるという信念を持ち、楽観的に明るく堂々と実行していくことが求められます。

保育所全体で取り組まなければならない行事（夏祭り・運動会などの大きな行事）について、コロナ禍でも子どもが楽しめるような内容を考え、計画を立てました。行事を行うに当たり、起こり得る問題点やそれに対しての対応策を全職員で十分に話し合いました。その結果、当日にトラブルが起きても、職員一人ひとりが落ち着いて対応することができ、子どもたちが安全に楽しく参加することができました。

今回のように、目標を楽観的に立てることで、それに向かって全職員が前向きに取り組むことができたのだと思います。コロナの影響で例年と同じようには保育活動ができないことも多くありましたが、職員間でいろいろな課題を想定し、対応策をしっかり考えていたため、落ち着いて実行することができました。このように悲観的に計画を立てることにより、当日多少のトラブルが起こっても、想定内と考え対処することができたため、保護者からの苦情等もなく、子どもたちが楽しみにしている行事を実施することができました。

コンセプトを立て、戦略的に行動し、結果を出す

自治体の仕事は、数値で評価されるものばかりではありません。そのため、仕事に結果を求めない風土もあります。

しかし、都城市においては、「自治体も経営する時代」との考えに基づき、経営資源（ヒト・モノ・カネ）を有効に活用し、市民の幸福と市の発展を実現しようとしています。

そのため、全ての施策に目標を設定し、その目標を達成するためのコンセプトを明確にし、コンセプトに沿った適切な戦略を練って、施策を推進しています。

このことにより、成功が得られ、より良い都城市が創られていきます。

新型コロナウイルス感染症の影響で、様々なイベントを行うことができない状況となりました。私の業務には、毎年約5千人を集客するイベントを通した啓発活動がありましたが、今回はイベントの実施を中止する判断をしました。しかし、啓発活動は継続性が重要であると考えています。イベント以外の効果的な啓発活動を検討した結果、分かりやすい展示物での啓発を行うことにしました。

初めての企画でしたが、これまでの経験を活かし市内外企業への説明や依頼、展示場所の確保を行いました。展示物で長期間の啓発を行うことにより、市内外の多くの方に啓発を行うことができました。また、初めてオンラインを活用した企画内容にも挑戦し、幅広い世代への周知を行うことができたと感じています。

予想外の出来事が起こり、予定していたことが実施できない中、状況に合わせたコンセプトを立て実行する、という経験をすることができました。また、今までの方法に捕らわれず、違う目線・新たな発想で業務を行うことで、新たな成果を出せると学びました。

都城フィロソフィエピソード集

編集　都城市総務部職員課フィロソフィ推進室

〒885-8555
宮崎県都城市姫城町６街区２１号
ＴＥＬ　0986-23-2119
ＦＡＸ　0986-23-6324